

ンダガラシ(帰)、カキツバタ、コウホネ、コガマ、コナギ(自)、ザゼンソウ、マツバイ(自)、ミズキンバイ

〈付〉目立つおもな湿性植物……………約20種

アメリカセンダングサ、イヌクイモ、カンエンガヤツリ、クサヨシ、サヤヌカグサ、スギナ、ダンドボロギク、チョウジタデ、ツリフネソウ、ヌマトラノオ、ハンゲショウ、ミゾソバ、その他ハナショウブ類

3. 感想(順不同)

- ① 皇居内の植物情報は、いままで水草類だけの調査資料が見当たらないので、この調査報告は不完全なから唯一となるだろうが、現状は概略上記のような結果であるといえる。
- ② 江戸城のような平城は、構築にあたり、土盛りをする必要から、当初かなり深い濠(10m以上)を掘ったところもあると考えられる。明治中期まで一続きだった道灌濠も太平洋戦争当時、紅葉山に地下防空濠を掘ったこともあり、現在では3個に分断されたり、どの濠も土砂が流入してヘドロが堆積して水深が浅く、沈水植物の生育には不向きで、前述のように沈水植物は極めて少ない。
- ③ ウキクサ類やヒシなどは荒川や印旛沼あたりから、もっぱら渡り鳥によって侵入してきたものと考えら

れる。

- ④ 乾濠や環境庁の管理下にある各外濠には、水草類が皆無状態になっているが、その最大原因は、不見識にも草魚の稚魚を多数放流したことによるものであることが判明している。
- ⑤ 皇居内外の濠の水は、従来玉川上水や堀井戸水によるものだったが、近年皇居周辺にも地下鉄が発達し、水の補給が十分でなくなってきたことも、水草類の生育にマイナスになっているようである。
- ⑥ 内および外濠のヘドロを除去することを念願するのは、筆者ばかりではないと考えられるが、それには〇〇億もの莫大な宮内庁や環境庁への国家予算を必要とする。しかし、戦闘機を2~3機つくる軍事費を控えれば、決して不可能なことではないと信ずる。ここに善処を切望してやまない。

最後になったが、今回の調査に際し、御協力下さった水草研究会会員の桜井義雄・浜島繁隆・松田仁松・大橋利明・原 茂樹・保坂三継および宮内庁庭園課の諸氏に対し、深甚の謝辞を申し上げる。

〈おもな参考図書〉

① 「皇居の四季」	学 研	1977年10月
② 「吹上の自然」	朝日新聞社	1980年3月
③ 「皇居の植物」	保 育 社	1989年11月

OINTECOL 1990

8月23日から30日まで第5回国際生態学会議(INT ECOL)が横浜市で開催された。世界各国から1500人余りの参加があり、連日、熱心な議論や研究交流が行なわれた。水草関係では“Ecology of Submersed and Floating Aquatic Vegetation”と題するシンポジウムがもたれた。いろいろな外国研究者と意見交換ができ、また今後の協力についても話し合えるなど参加者にとって有意義な1日であった。日本からは下記の5題の講演があったが、総合討論の時間もこれらの講演をめぐって白熱した議論が展開された。日本で現在行なわれている水草研究が世界に通用するという自信がわいてくると同時に、今後どのように我が国の水草研究を進めていけばよいのか、最近、若手の研究者が少ないだけに、今が頑張り時との思いも強い。

今回のシンポジウムにおける日本側の講演を記録しておく。

Ikusima, I. & M. Kurihara: Ecological Behavior of a Waterchestnut Stand in an Eutrophic Lake.

Kunii, H.: Habitat Segregation of Floating-Leaved Aquatic Macrophytes.

Kadono, Y.: Adaptive Radiation of Japanese Potamogeton.

Nohara, S. & T. Tsuchiya: Annual Changes in Surface Cover of Floating Leaved Plants.

Tsuchiya, T.: Leaf Life Span of Floating-Leaved Plants.

(角野康郎)